



# Artist Clip

no. 018

## 今井政之

Masayuki Imai

### 40年余の面象嵌で、“新たな挑戦=生きる”を続ける名匠

photo: Yasukuni Iida text: Yurie Kimura

**「デ**ッサンした生き物を、面象嵌の技法で、生きたまま、ボディと一体化させたのが私の作品。図案じゃないですから、生きてないといけないんですよ」

面象嵌は今井政之氏が約40年前に始めた、素地の器体に数種類の異なった色土を嵌め込み文様を表現する技法で、それぞれの土の収縮率、色土の発色などの研究を重ねながら制作が続けられている。作品の表面は滑らかで、筆で描いたと見まごうほどだ。

今井氏が陶芸の道を志したのは、骨董品を蒐集していた父親の「絵描きは売れへんから陶器のほうがあえて」の一言がきっかけだったという。創作陶芸を志すが戦後の京都は転入制限があり、備前での修業を経て京都の楠部弥次氏に師事した。

「師匠がよく言っていたのは、作は人である、人の真似をしたらいかん。だから自分なりに新しいもの、誰にもできないものを作ってきた。今も窯のたびに、新しいものに挑戦しています」

米寿を記念した今回の展覧会にも、新たな取り組みの作品が2種類登場する。一つは、平和を願い制作した作品。広島に投下された原爆の閃光をその目で見た今井氏は、オバマ前アメリカ合衆国大統領が2009年、核廃絶に向けて行ったプラハ演説に感動して原爆ドームをモチーフにした陶版を贈呈し、2016年の広島訪問に際しても広島県知事の依頼を受けて平和を祈念した壺を寄贈したが、きな臭い世界情勢を憂慮し、改めて平和への想いを込めて作品を制作したという。もう一つは、去年から使い始めた磁器に近い白土に、面象嵌を施した作品だ。

「これまで使ってきた土と収縮率が違いますから、それに合わせて色土の割合も変えながら作りました。今まで見たことのないものになったと思います」

米寿の米にちなんで白い焼きものなのかとたずねると、「ええ思いつきや、そうかもしれん」と豪快に笑った。

自然の生物をモチーフにする理由は、自然は嘘をつかないから。「それに共鳴して自分も自然に生き、自然にチャレンジしていく。それが作品の中に燦然と表現できたらええなあ、と思いますね」

今井氏にとって、新たな挑戦を続ける＝生きるの、なのだろう。



「図案じゃないから、生きていないとだめなんです」

「聖地への飛翔」(約径32.5×高さ41.0cm)



いまい・まさゆき 1930年、大阪府生まれ。備前を経て、1952年、京都へ。1953年日展初入選。1978年、広島県竹原市に登窯を築く。2003年、日本藝術院会員に就任。2011年文化功労者として顕彰。

#### Information

高島屋美術部創設110年記念  
文化功労者  
今井政之米寿展

京都店 6階  
9月19日(水)→25日(火)  
横浜店 7階  
10月17日(水)→23日(火)  
上記各店美術画廊  
※最終日は午後4時閉場